

土木屋の読書と旅 (20)

令和5年7月

記憶というものを考えてみる。椎名誠のエッセー『風景は記憶の順にできていく(集英社新書ノンフィクション)』はつぎのような文章から始まる。

『遠い記憶は夢と同じようなものだ。なにもかもおぼろで曖昧な、静止画が少しずつ仕方なく連動していくような、いたって頼りないあわいの風景がよく似ている。遠い記憶も、その朝見た夢も、どちらもやるせないモノクロームで投影される。…記憶は冷淡だ。…ぼくの記憶の断層のずっと深いところにまだ堆積したままゆっくり逆巻いている。人生が進んでいくにつれて、その上に容赦なくおびただしい数の騒がしい風景が蓄積し、おそらくとんでもない圧力をかけているのだろうに、小さい頃にぼくのなかに焼きついた弱々しくおぼろげな記憶は意味とか理由とは無関係に生き続けている。』



最近「加齢」という言葉がとうとう実感できるようになった。辞書に言う高齢化に伴う肉体的衰退の過程というよりも、思考のベクトルが未来よりも過去に向かうことの方が多くなったのではないかと危惧する日常である。相手の顔は分かっても名前がすぐに出てこないことはよくあることではあるが。

* * *

朝日新聞の文化欄に「語る—人生の贈りもの—」という連載コラムがある。4月の語り部はアナウンサーの山根基世さん。コラムは宮崎駿のジブリ映画のような親子の写真から話は始まる。

*写真は朝日新聞4月4日掲載「幼少時、父の達夫さんと=本人提供」より『高松生まれですが、父も母も山口・防府の出身です。土木技師をしていた父は、四国のダムで仕事をしていました。私は物心ついたときには防府にいました。父はあちこちの土木事務所に異動して、小学校は3回転校しました。《県営佐波川ダム(現山口市)の工事に従事した父に連れられ、小学4年の1年間を野谷という奥地の村落で暮らした》 全校生徒20人もいないような、小さな分教場に通いました。……自然とふれあった野谷での1年が感受性を育ててくれました。自然での暮らしは人間を育てる。原点はここにあるのかもしれませんが。』



また、基世は処女作『出会いの旅(毎日新聞社1988年刊)』でふるさと防府への思いをつぎのように述べている。ちなみに山根女史は私にとって防府高校の6学年先輩になるが、実物を見たことはない。芥川作家：高樹のぶ子は基世の松崎小学校、国府中学校、防府高校の1学年先輩に当たり、二人の対談記事をその内容は思い出せないが以前読んだ記憶がある。



『故郷を離れている私にとって、「天神様」は自慢の種である。「立派な天満宮」のヨ。太宰府、北野と並んで日本三天神のひとつなのヨ。と自慢してもなかなか信じてもらえないのが悔しい。自慢の防府天満宮の、一年で一番大きな祭りが裸坊祭りなのである。…(裸坊祭り)の段』

私が小学生の頃、「天神祭り=裸坊まつり」は現在と違い旧暦に従い土日休みに関係なく行われていた。小学校の授業は昼までに終わり午後から祭りに繰り出せるような一大イベントであった。柳田国男のいうハレ(非日常)とケ(日常)の区別が生活感覚としてあった時代だったと思う。駅通りから天神通りへと年に一度の大混雑の中を天満宮へ向かう。当時はテレビでしか見たことのない山手線のラッシュ時の

土木屋の読書と旅 (20)

令和5年7月

“立錐の余地もない”プラットフォームの疑似体験だった。境内の西側の空き地には木下サーカスの天幕が張られ、そこには非日常の空間があった。端正な顔立ちの五、六歳ぐらい年上の少女団員がパンフレットを売っていたのを覚えている。サーカスの天幕の中で迷子になり、しかたなく兄と二人で家まで歩いて帰って、警察へ迷子の届をした母親から叱られた記憶がある。

*私の心象風景にあう裸坊祭りの写真：S.37 嘉戸氏の写真⇒



『先日、俳優座に劇場に取材に行った。制作部に我が故郷、山口県の防府高校の先輩がいることを知った。後日、同郷の誼と一緒に飲みましょうということになった。夜の六本木で故郷の悪口を肴に飲む。…「そうよ、私たち、高校までは本物の絵を見る機会もなかったし、音楽を聴くチャンスもなかった。芝居なんて論外だった。もうちょっとましな所で育てば、もうちょっとましになったかもしれないのに！あそこは、本当に文化果つる地よ」などと共にダメな故郷を嘆きあう。だが、しかしと酔い始めた頭の片隅で考える。「こんな台詞をだれか他の土地の人間が言ってみろ、絶対に許さない」と。…故郷って本当に不思議なものだ。…(私のふるさと)の段』

高校、大学を卒業するまで、確かに防府には近くに美術館もなければコンサートホールもなかった。県立美術館ができたのは昭和54年、市公会堂ではたまに歌謡ショー的なものはあったがクラシックやジャズコンサートの類はほとんどなかった。市立図書館も貧相な木造づくりで冷房すらなかった時代である。中学1年で同じクラスになって以来、高校まで同窓であった素村裕子（東京芸大音楽学部首席卒業バイオリニスト）さんが学校の音楽クラブには参加せず福岡まで毎週レッスンに通っていたのを覚えている。文化祭で一度演奏してくれたことがあるが、音楽クラブの演奏とのあまりにもハッキリした格差に愕然とし、芸術とはこんなものかと感嘆した。ただ若き頃、都会に出た者が故郷を自嘲気味に“文化果つる地”と呼ぶことのアイロニーは成立するとは思う。青春の“照れ”である。

「山奥に赴任していた父の思い出」と「ふるさとして何だろうという問い」は彼女の他の著作にも触れられているテーマである。『日本列島幸せ探し(講談社)』では彼女はこう述べている。

『人は誰でも、本人が好むと好まざるとにかかわらず幼い時生育した土地の影響が体にも心にも刻み込まれてしまう。故郷DNAは後天的ではあるけれど、その人の一生にわたってのその性格や感情を左右するのだ。「山口県のこういう点が優れているから私は故郷山口を愛す」—というような理屈ではない。…ただ生理的に反応するのだ。…故郷というのは、結局そうした「生理的記憶」の積み重ねのことではないだろうか—その意味では私の故郷は、…防府というところではあるが、そこに故郷があるのでなく、故郷は私の中に存在しているのかもしれない。』

* * *

生理的記憶とは何だろうか。五感を伴うぼんやりとした画像？ 私の場合は暑さ・寒さの体感温度とイベント(出来事)のある風景。シャープな全体的映像ではなく点描の連なり=故郷なのだろうか。

私の故郷についてのベースとなる生理的記憶とは昭和40~50年代の防府でのイベントと結びつく風景ではないかと思う。県立図書館にあるゼンリン住宅地図(S51年版)で街並みの記憶を再確認する。防府駅前から天神通り交差点(栄町)までの約600mの区間。その両端にあった大型店舗と映画館、駅前のパチンコ店、3軒の本屋、同級生の家業の店舗(呉服店、園芸店、大衆食堂)。それぞれの記憶が確かに存在した地図上の位置関係から連鎖反応のようにその時、その場所で起こった出来事や感情ととも

土木屋の読書と旅 (20)

令和5年7月

に蘇る。特に、高校生になってから自由に行けるようになった映画館にまつわる思い出は数多くある。

駅前の防府東映で支配人に勧められた高倉健の“昭和残侠传”、テアトル劇場でみた“男はつらいよ”シリーズの第1作からの3本立て、中学の校区内にあった洋画専門の三劇でみた話題作の数々。防府には封切館はなくいずれも半年遅れの2番館であったが3本立て興行の高校生にはやさしいお得な映画館であった。当時は“スクリーン”などの一般向けの映画雑誌が流行っていたこともあり、洋画専門の三劇では幕間で照明が付き意外なカップルや友達が近くの席にいたことに驚くこともあった。

私の好みはイタリアなどのヨーロッパ的な香りのする映画であり、たとえば映画としての評価は低いがシリオラ・チンクェッティが主演で“non ho l'eta”ノノ・リターで始まる挿入歌「夢見る想い」が切ないイタリア・スペイン合作の『愛は限りなく』やチャールズ・ブロンソン/マルレーヌ・ジョベール主演のフランス映画『雨の訪問者』(監督:ルネ・クレマン、音楽:フランシス・レイ)などが個人的なイベント(出来事)と連動して記憶に残る映画である。



* * *

読売新聞(6/20)に『昭和の薫り漂う萩市の映画館「萩ツインシネマ」を舞台にした自主製作映画「さよなら萩ツインシネマ」が完成し、同館で上映されている。実際の支配人が演じるコメディタッチの物語。「映画を通じて、少しでも映画館を好きになってほしい」と来館を呼びかけている。』との記事が載った。



久しぶりに昭和の薫りがするという映画館に行ってみたいと思った。上映時間は10:30と15:45の2回。まち歩きも兼ねて1時間前には到着、近くの田町アーケード街をぶらつく。映画館は白い塗装で化粧された昭和末期の複合ビルの3階。1階は入口右手に映画館事務所と手書きの時間案内、左手側に軽食喫茶と奥にレストラン、2階はスナック等の飲み屋。ゆっくりと階段を上がると受付ロビーへ。券売所で入場券を買い、もぎりのおばさんが半券をくれるという昔のスタイルではなく、館員のおばさんは年を取っているがスマートな対応。雰囲気



は昭和の薫りと言えなくもない。上映室はふたつあり、大ホールは鉄則の「名探偵コナン」上映で今回は小ホールの方で座り心地の良い青いシート。今回の映画の出来は製作費800万円ということと初めての自主製作ということを加味して鑑賞者各自の判断に任せ、コメントはしない。

* * *

そろそろ旅に出たいと思った。私の心理を読むように『旅行読売』7月号の特集は夏休みを目前に迎えた王道の企画“青春18きっぷでできること”である。

青春18きっぷは国鉄改革進行中のS(57)58年発売された、フルムーン夫婦グリーンパスにつづく、国鉄最大のヒット商品のひとつといわれる。もちろん年齢に関係なく買える切符である。還暦を過ぎ、暦は一度回ったのであるから古希を目前にした青春というものを謳歌するのもあり得るのではないかと思う。人に迷惑をかけない範囲で、新しい記憶の層を重ねるために。

古谷 健

